

目的：最近アレルギー疾患が増加しているといわれている。食餌性アレルギーは、特に子供に多く、アレルゲン物質の同定等の研究も進んできている。しかし、同じ食事をとっていてもアレルギーにならない子供もいるなど、まだ十分には食餌性アレルギーに罹る原因は判明していない。そこでまず、名古屋市内及びその周辺都市における保育園児の食餌性アレルギー発症率及び授乳、離乳食など子供の食生活等の検討を行った。

方法：名古屋市内および名古屋に隣接する春日井市内の公私立保育園の園児（0-6 歳）の母親を対象として食餌性アレルギーの調査を行った。食餌性アレルギーの有無、発症の年齢、アレルギー原因食品、授乳の種類、離乳食、家族のアレルギー、母親の妊娠、授乳中の食事の好み等29項目に渡る調査を行った。調査結果はクロスタット（東洋情報システム）を用いて処理した。

調査結果：名古屋市内の保育園に通う園児と春日井市内の保育園に通う園児の食餌性アレルギー罹病率を比較した。春日井の保育園児に比べ、名古屋市内の保育園児の方が多く罹病していた。アレルギー発症の年齢は 0歳が最も多く 50 % を占めた。アレルギー原因食品として第1位に挙げたのは、卵、次いで乳製品、豆類と三大アレルゲン食品が挙げられ、次いで豆類、肉類、植物油と続いた。アレルギー児とアレルギーを持たない子供の授乳内容、離乳食として食べさせた食品等、各母親から聞いて比較したところ、顕著な差は認められなかった。さらに、妊娠中に好んで食べた食品、授乳中に多く食べた食品や家族の遺伝的背景について比較検討した。